

G-9 家庭科教育目標の明確化について(オ2報)—— 情意・運動技能領域——
福井大教育 ○木村温美 福井県土敦賀高校 田辺幸子

目的 オ1報では食物、被服領域に例をとり、主として認知的領域における目標表現語彙について、日米の比較を行った。今回は、「家族関係および児童の発達」領域を中心にして、情意的領域を、被服領域を中心にして運動技能領域を、意図する目標の水準および用語について日米の比較を行い、目標明確化の一資料としたい。

方法 前回と同様に、Bloomらにより開発された一連の目標語彙に関する文献、比較資料としては日本の中学校教科、家庭指導要領および同指等表を、アメリカ資料としてはミネソタ州教育局発行資料を用いた。

結果および考察 オ1報で報告した認知的領域の扱いは、今回対象とした2領域の扱いはかなり異なっていた。すなわちいづれも低、中段階の目標にあるものが大部分であった。このことは①情意的領域においては、価値の内在化をめざすものであるから、知的認識に比べて長期間の学習を必要とするため、中学校段階における達成度にはかなり限界をみとめた結果と思われる。また②運動技能領域も、認知的領域の中途のオ3水準応用のところに、適用(Apply)として位置づけられており、いわば認知的領域におけるより高水準目標行動達成のための中間目標の位置にある。これに対し日本の指導要領では、技能の習得は重要な目標として位置づけられている。このように日米においては、中学段階における技能の位置づけに相違がみられた。